

# M. マクルーハンによる 「メディア・アプローチ」の可能性

—メッセージ伝達におけるメディアの作用—

時 津 啓  
(2006年10月5日受理)

M. McLuhan's *Media Approaches* and Its Possibility:  
Media Effects in Communication

Kei Tokitsu

Educational studies have paid attention to media contents but not media effects in education as communication. This paper explores further possibilities of M. McLuhan's *Media Approaches* that consider media effects.

By focusing on McLuhan's theories of typography and TV, the paper argues that McLuhan's *Media Approaches* have three stages. On first stage, he extracts a characteristic of one medium by comparison with another medium. On second stage, he analyzes typical users of the media- for example, children and schools in his case. And on third stage, he finds out effects of the media.

However, his *Media Approaches* have limitations of his understanding insufficient media characteristics. We need to move beyond his limitations and renew *Media Approaches*.

On this purpose, this paper takes advantage of Masachi Osawa's recent remarks on mobile phone. And the paper suggests that clarifying media effects with *Media Approaches* should have a possible shift of media perspectives. We have not only a relationship with others in communication. We also have a relationship with media in communication. In this understanding, the paper indicates that media effects regulate our communication.

Key words: Marshall McLuhan, communication, typography and TV, mobile phone

キーワード：マクルーハン，メッセージ伝達，活字とテレビ，携帯電話

## はじめに

教師は、生徒へメッセージを伝える。生徒は、そのメッセージを学ぶ。このことは、多くの人が想定する教育行為だろう。もちろん、生徒には、教師からだけでなく、教科書の内容や授業で使用されるテレビ番組などから様々なメッセージが届けられている。生徒は、その他にも家庭や街のなかでテレビ番組、ラジオ番組、新聞記事、街頭広告などからもメッセージを受容している。これまで教育学は、このような様々な発

信源をもつメッセージの妥当性や正確さに注意を払ってきたといえる。例えば、歴史教科書の記載内容をめぐっての議論は盛んである。さらに、テレビ番組やインターネットのコンテンツの低俗性や暴力性は問題視されている。しかしながら、このようなメディアをめぐる議論は、あらゆるメッセージが、例外なくメディアを通して伝えられていることを十分に踏まえて展開されてきたのだろうか。

私たちは、「伝達する（伝達される）メッセージは何か」に対して注意を払う一方で、「メッセージ伝達

において、メディアがいかなる役割を担っているのか」という問いを軽視していないだろうか。確かに、教育実践におけるテレビやインターネットの利用可能性は数多く主張されている<sup>1)</sup>。ここで注目されているのは、教育内容だけではない。「生徒へいかに教育内容を伝えるのか」という方法が議論されているのである<sup>2)</sup>。しかしながら、見過ごすことができないのは、これらの議論でも主眼となっているのが、メッセージであることである。ここでもメディアはあくまで教育内容を伝える単なる「道具」としてしか捉えられていないのである。いわば、メディアは、教育内容というメッセージを伝えるための手段なのである。このように考えると、私たちは、伝達される（伝達された）メッセージに固執し、メッセージ伝達的前提であるメディアの作用を問題にしてこなかったといえる。すなわち、問題はメッセージ伝達におけるメディアの作用にある。

ここで、1960年代のカナダでマクルーハン（Marshall McLuhan）の展開した〈メディア論〉に注目したい。彼の見解にしたがうと、メッセージはメディアを通して伝達される「メディアの内容」である。この内容がメディアを通して伝えられる以上、この内容にはメディアが作用する。彼は、この作用を「メディアの形式」と呼ぶ。マクルーハンは、「メディアの内容」とそれらへ作用する「メディアの形式」を区別しているのである。彼はこの「メディアの形式」を重視し、これまで私たちが注目してきたメッセージを副次的な存在とみなす。メディアこそが、メッセージである（「メディアはメッセージ」）、と。マクルーハンは、これまでのメディア理解を反転させ、メディアの作用からメッセージを眺めているのである。もちろん、このようなマクルーハンの主張は、メッセージ伝達の一側面を過度に強調しているといえる。なぜなら、メッセージ伝達にメディアが不可欠であることは、やり取りされるメッセージを副次的とみなす根拠にならないからである。しかしながら、マクルーハンが探究していたのは、「道具としてのメディア」という見方にしたがう限り捉えることができないメディアの作用である。この作用の解明は、テレビやインターネットによるメッセージ伝達があふれる今日の状況を認識する上で欠かせない着眼点を提供する意味をもっている。

本稿の目的は、マクルーハンの主張を手がかりに、メッセージ伝達におけるメディアの作用を解明することにある。

## 1. マクルーハンの〈メディア論〉をめぐる論議の概要

教育学のなかで、マクルーハンの〈メディア論〉を本格的に取り扱った研究は少ない<sup>3)</sup>。しかしながら、近年マクルーハンの〈メディア論〉の方法である「メディア・アプローチ」を踏襲した研究がなされ始めている。「メディア・アプローチ」とは、メディアによる情報ではなく、メディアそれ自体が人間の認識や知覚をいかに変化させたかを描き出す立場である [McLuhan 1960: 572]<sup>4)</sup>。例えば、メイロウィッツ（Joshua Meyrowitz）は、話し言葉、文字・活字、電子メディアというマクルーハンの有するメディア史観にしたがい、それぞれのメディアと教育のあり方を検証している。そのなかでメイロウィッツは、マクルーハンの教育に関する主張が今後の教育のあり方を指し示しており、今後教育学はマクルーハンの主張を受容せざるをえないと結論付ける [1996]。さらにスティング（Stephan Sting）は、近代教育学が文字と深い関係にありながら、文字との関連を軽視してきたと指摘する。そして主体の形成は文字の使用と密接な関係があることを強調する [2001]。また大黒も、教育がメディアの変化に合わせてパラダイムを変化させてきたことを指摘し、現在の情報社会において教育は新たなパラダイムを求められていると主張する [2003]。

まだ始まったばかりの教育学におけるマクルーハン研究と比べて、メディア研究の領域ではすでに様々な立場からマクルーハンの〈メディア論〉が論じられている<sup>5)</sup>。ここでは、マクルーハンの教育に関する主張も取り上げられ、彼が教育や子どもに関心を寄せていた事実が指摘されている<sup>6)</sup>。マクルーハンの〈メディア論〉は、教育の考察をも射程におさめる広範な試みであるというわけである。しかしながら、これらの研究は、マクルーハンの教育や子どもに関する主張が、具体的に彼の〈メディア論〉のなかでいかなる役割を担っているのかを明らかにしていない。本稿は、〈メディア論〉の方法である「メディア・アプローチ」を一般化し、マクルーハンの教育や子どもに関する主張が、〈メディア論〉のなかで欠かせない役割を担っていることを指摘する。

## 2. マクルーハンの活字論 —学校教育と活字

マクルーハンにとって当時の伝統的な学校は「印刷文化の管理人」であり、「均質化のための機械」と特徴づけられる。学校は、孤独な個人を国語ナシヨナリ

ズムにより集団化し、印刷技術が人間へもたらす作用の中心部分を形成するのである [1962: 215=1986: 328-329]。

マクルーハンにしたがえば、このような学校でなされる教育は「マス教育」である。「マス教育」とは、探究の保証、学びの保持、人生を通じた変化を奨励するというよりも、むしろ個人の成長と発達のプロセスを遅延(slow)、コントロールするものである[McLuhan and Leonard 1967: 23-24]。子どもは、この遅延とコントロールのもとで、競争により動機づけられ、行為する [McLuhan and Leonard 1967: 24] のである。ここでの子どもは、メイロウィッツのいうように、一方で、イニシアティブを奨励されつつも、他方で教育的なコントロールの配下にある。彼にしたがうと、学校教育とは、子どものイニシアティブと教育的コントロールによって、子どもの標準化された生産をもたらす [1996: 103] システムといえるのである。

もちろん、今日の教育論議を踏まえると、このような学校教育に対するイデオロギー批判は、ありふれているように聞こえるだろう。しかしながら、マクルーハンの特徴は、学校教育のもつイデオロギー性が、活字の特性に由来すると捉える点にある。マクルーハンによると、「印刷物は、史上初の大量生産物であったが、それと同時に最初の均質にして反復可能な〈商品〉」 [1962: 125=1986: 193] である。敷衍すれば、印刷物に書かれた活字とは、音を空間的な等価物へと還元させたものなのである [Ong 1982: 91=1991: 190]。このマクルーハンらの指摘にしたがえば、学校教育に見られる遅延と教育的コントロールは次のように説明できるだろう。あらゆるものを空間的に位置づけるには、多様な性格を保持する情報を等価物へと還元するルールを必要とする。例えば、多様な地理上の性格を空間的等価物へと還元した地図には、地図記号や等高線などのルールがある。それと同様に、あらゆる情報を空間的等価物へと変換させる活字にも、文法を含めた様々なルールがある。すなわち、一方でルール習得にかかる時間が教育的コントロールを可能にする。また他方で、教育的コントロールによってこそ、子どもはルールを習得しているのである。

このように考えると、活字の特性は、学校教育に象徴的に反映されているといえる<sup>7)</sup>。なぜなら、学校教育の特徴である遅延と教育的コントロールは、あらゆる情報を空間的等価物へ還元する活字の特性に支えられているからである。裏を返せば、マクルーハンにとって、学校教育は、活字の特性を映し出す「鏡」の役割を担っていることになる。マクルーハンは、活字の特性が象徴的に現れる学校教育の分析を通して、活字の

作用、すなわち遅延とコントロールを決定しているのである。

### 3. 活字とテレビの差異—「ホット」なメディアと「クール」なメディア

マクルーハンが活字を「ホットなメディア」、テレビを「クールなメディア」と呼び、両者の差異を強調している<sup>8)</sup>。「ホットなメディア」とは、高精細度という特性によって単一感覚を拡張させるメディアである。例えば、「ホットなメディア」に分類される活字は、視覚のみを拡張させるメディアである。私たちは、読書することでこれまで訪れたこともない土地の情報や会ったこともない人の意見や見解を知ることができる。マクルーハンにしたがえば、このことは、活字を通して私たちが視覚を拡張させたのと同様の経験をしていることを意味する。それに対して、「クールなメディア」は低精細度である。例えば、「クールなメディア」に分類されるテレビは、与えられる情報の精細度が低いため、視聴者は、この情報を補わなくてはならないとされる [1965: 22=1987: 23]。視聴者は、あらゆる感覚を駆使して、この低精細度の情報を補おうとする。つまり、マクルーハンによれば、テレビは人間の全身感覚へ作用しているのである。

もちろん、テレビの映像が低精細度であるというのは、当時のテレビの特性である。そのため、今日のテレビの技術的発達を考慮すると、この分類は妥当ではない。なぜなら、大澤の指摘するように、私たちは1960年代のメディア状況と異なり、ハイビジョンの可能性を知っているからである [1995: 83]。今日では、マクルーハンのいうように、テレビの映像は決して低精細度といえないのである。

しかしながら注目すべきは、マクルーハンの描くテレビの技術的特性が正確であるか否かだけではない。それだけではなく、むしろ彼がテレビの特性からテレビの作用を導き出していることに注目すべきである。そうすると、次のような疑問が生じるだろう。マクルーハンが、いかにしてテレビの特性とテレビの作用を結びつけているのだろうか、と。なぜなら、確かにテレビには、活字と異なった特性がある。しかしながら、この差異はあくまで特性上の差異であり、それは活字やテレビの作用と無関係なはずだからである。

ここで目を向けるべきは、マクルーハンが注目する子どもの姿である。彼は『メディア理解』のテレビの項目を次のような小学校低学年の子どもの姿から始めている<sup>9)</sup>。マクルーハンによれば、印刷物を読むとき、子どもたちの目は印刷物に近い位置に固定されている。

マクルーハンはこの子どもの姿から次のことを読み取っている。「子どもたちは、テレビ映像の全体関与的な感覚が発する命令を、印刷物の世界にまで持ち込んでいる」[1965: 308=1987: 320]<sup>10)</sup>。先述したように、「ホットなメディア」である活字は、高精細度由来し、視覚という単一感覚へ作用する。一方、「クールなメディア」であるテレビは、低精細度由来し、全身感覚へ作用する。「子どもたちは、印刷物を深層において読もうとする。子どもたちは印刷物にすべての感覚をもちこむが、印刷物はそれを拒否する。印刷物が要求するのは一つだけが分離した、余計なものを剥ぎ取られた純視覚機能であって、全ての感覚が統合された感覚中枢ではない」[1965: 308=1987: 320]。マクルーハンは、小学校低学年の子どもが、テレビを見るように、読書していると考えている。

このことは、テレビの普及と密接な関係があると思われる。というも、テレビの普及は、子どもたちが、すでに小学校入学前、日常生活のなかでテレビを視聴し、テレビの作用を受けていることを意味する。しかしながら、活字の作用を受けた経験は、テレビのそれに比べ少ないだろう。なぜなら、先述したように活字を通じた経験は、文法を含めルールを学ぶための時間が必要だからである。もちろん、このようなマクルーハンの指摘は、妥当ではない。というも、テレビが家庭に普及する以前にも、大なり小なり小学校低学年の子どもは、印刷文化との接触に苦勞したのではないと思われるからである。マクルーハンの注目する子どもの読書姿勢は、その苦悩と解釈できなくもない。

しかしながら、ここでも注目すべきは、マクルーハンの指摘が科学的に妥当性をもっているか否かだけではない。目を向けるべきは、マクルーハンが子どもの読書姿勢を分析することで、テレビの特性とその作用を結びつけていることである。いわば、活字の特性とその作用が学校教育の分析によって結び付けられたように、テレビの特性とその作用は、子どもの読書姿勢の分析によって結び付けられている。子どもは、テレビの特性を映し出す「鏡」の役割を担っているのである。

#### 4. 「メディア・アプローチ」の一般化と大澤真幸の電子メディア論

マクルーハンの活字論、テレビ論をまとめると、次のようにいえるだろう。彼は、活字とテレビの技術的特性を見出すために、他のメディアと比較する。活字の技術的特性である「空間的等価物への還元」は音声との比較、テレビの技術的特性である「低精細度」は活字との比較によって導き出されている。つまり、「メ

ディア・アプローチ」の第一ステージは、他のメディアとの比較によってメディアの技術的特性を抽出することである。次に目が向けられるのは、日常生活でのメディア利用である。マクルーハンは、学校教育や子どもの分析を通して、活字やテレビの特性が、利用者へいかに反映されているのかを明らかにする。いかにいえば、彼はメディアの技術的特性を映し出す「鏡」として学校教育と子どもの姿を利用するのである。つまり、第二ステージは、日常の具体的なメディア利用を分析することである。そして、最終的に、この分析の結果を踏まえ、メディアの作用が見出される。第三ステージは、メディアの作用の決定である。

もちろん、この「メディア・アプローチ」のなかで決定的な意味をもつのは、第一ステージ、すなわちメディアの技術的特性の抽出である。なぜなら、この特性を抽出しない限り、次なるステージへ進むことができないからである。先述したように、マクルーハンのいうテレビの特性には、1960年代という時代的制約やテレビ創成期ゆえの誤解があふれている。そうすると、その制約や誤解を出発点に導き出される作用を無批判に受け入れることはできないだろう。例えば、ザッピングがそうであるように、今日の私たちのテレビ視聴は、低精細度の情報を読み解くようになされていない。テレビは、全身感覚へ作用しているようには到底思えないのである。つまり、マクルーハンの描くメディアの作用は、今日のメディア状況から判断すると限界があるといわざるを得ない。

しかしながら、大澤は、このようなマクルーハンのもつ時代的制約や誤解を克服することができるという。大澤にしたがえば、前節で取り上げたマクルーハンによるメディア分類には、三つの規準が設定されている。彼が、マクルーハンの主張から読み取った規準を整理すると、以下ようになる [1995: 82]。

表1 マクルーハンによるメディア分類の規準

ホットなメディア	クールなメディア
高精細なメディア	低精細度のメディア
受け手の参与性が低い	受け手の参与性が高い
単一感覚に作用	全身感覚に作用

マクルーハンの指摘する第一の規準と第二の規準の関係性を要約すれば、次のようになる。受け手はメディアの精細度が低いと、その不完全性を自分で補おうとする。そのため、必然的に受け手の参与性が高まる。しかしながら、大澤によれば、「高精細度か低精細度か」



という第一の規準は、第二の規準、「受け手の参与性の高低」に従属する副次的な規準である。大澤は、もしも参与性を規定する要因が精細度でなければ、第一の規準は放棄できるという [1995: 83] ののである。すなわち、第一の規準を更新する必要があるというわけである。マクルーハンのいう「メディア・アプローチ」は、第一のステージを出発点に、第二、第三ステージへとつながっている。そうすると、第一ステージであるメディアの技術的特性の更新は、今日のメディア状況にふさわしい「メディア・アプローチ」の更新へつながっているといえるだろう。

それでは、大澤の考える電子メディアのもつ技術的特性はなにか。大澤によれば、電子メディアの技術的特性は二つある。第一の特性は、時間的側面から見出される。それは、情報の伝達が速くなることである。第二の特性は、空間的側面から見出される。それは、情報を広く拡散できることである。私たちは、一方で話し言葉を使用することで相手に速く情報を伝えることができる。しかし、その場合情報の空間的広がりには限度がある。なぜなら、話し言葉による情報伝達は、私たちの声の届く範囲に限定されるからである。私たちは、他方で文字や活字を使用することで、遠くにいる人へ情報を伝えることができる。この場合、受信者は、遠くに離れていても構わない。しかし、その情報が他者のもとへ届けられるには、多くの時間を必要とする。このように考えると、話し言葉や文字・活字は、特性上、時間的・空間的な制約や障害をもっているといえよう。

そのような話し言葉や文字・活字と比べて、電子メディアは、話し言葉や文字・活字がもつ時間的・空間的な制約や障害を技術的に克服している [大澤 1999: 68]。例えば、電話の相手は、私たちの声の届く範囲に存在する他者ではない。さらに手紙を書き、近況を知らせるのにも時間を有する遠くにいる他者でもない。電話の相手は、遠くに居ながらも目の前にいて会話が可能な他者、すなわち「特殊な他者」である。このように電子メディアは、「特殊な他者」を私たちの目の前に連れてくることができる。私たちは、他者を「近接してくる」存在として認識できるようになるのである。このように考えるならば、電子メディアの技術的特性とは、「時間的・空間的な距離の克服」にあるといえる。

## 5. 携帯電話によるメッセージ伝達

現在の携帯電話は、ひとつのメディアというよりはあらゆるメディアの機能を複合的に兼ね備えたメディ

アである。そのため、携帯電話の分析は、「メディア・アプローチ」の更新にもっとも適しているといえるだろう。

例えば、携帯電話のメール機能を使用したメッセージ伝達を考えてみよう。若者らは、この機能を利用して、私たちの考える文字だけではなく、様々な記号を組み合わせた「顔文字」と呼ばれる文字をやり取りしている。具体例としてその一部を挙げると、以下のようになる [藤井 2005: 501]。

表2 顔文字とその意味

顔文字	意味
(^o^)	にこにこ、ハッピー
(TT)	悲しい、ショック
(・_・)	凝視、絶句

これらは、文字と同列に配置され、受信者へ届けられている。いわば、これらも文字と同様に意味をもつメッセージである。具体的には、「今日でテスト期間が終わった (^o^)」のように使用される。受信者は、このメッセージから「テスト期間が終わった」という事実と同時に、送信者の「ハッピー」という感情まで認識することになる。

先述したように、話し言葉や文字・活字によるコミュニケーションは、使用されるメディアの特性上、時間的・空間的制約や障害をもっている。そのため、自己と他者は、厳密に区別され行なわれていた。このような厳密な区別は、受信者と発信者は、お互いに相手のなかを直接のぞきこむことはできないことを意味している [大澤 2001: 64]。このようなコミュニケーション理解にしたがうと、発信者は自分の意志をコードによって翻訳する。そうすることで、メッセージを作り出すわけである。そして、受信者は再びコードによってそのメッセージを解読して意味を確定していることになる。

しかしながら、大澤のいうように、電子メディアによるコミュニケーションは、これまでのコミュニケーションとは異なる形式をもつ。大澤は、「顔文字」によるメッセージ伝達も踏まえながら、携帯電話はコミュニケーション形式を変化させたと指摘している。電子メディアによるメッセージ伝達は、単に受信者と送信者をつなぐチャンネルの変化を意味しないというわけである [2001: 65]。電子メディアがもたらす「時間的・空間的距離の克服」は、自己と他者の厳密な区別を限りなく無化するように思える。つまり、コミュ

ニケーションに必要なコードへの翻訳やその解説を省略して、いままで見ることができなかった内部を見ることを可能にしているように見えるというわけである。大澤は、このことをコミュニケーションにおける「極限的な直接性」と呼ぶ [2001: 64]。

これまでのメディアは、受信者と送信者のあいだに存在し、間接的に両者を結びつける役割を担ってきた。いわば、メディアはメッセージ伝達に際して「クッション」の役割を担ってきたのである。しかしながら、大澤が電子メディアから見出すのは、このような認識と正反対である。むしろ、電子メディアこそが、本来、時間的・空間的に離れている送信者と受信者をダイレクトに結びつけ、「直接的」なメッセージ伝達を可能にしているのである。もちろん、大澤の指摘はコミュニケーションにおける電子メディアの作用をデフォルメしているといえる。なぜなら、「顔文字」を使用したメッセージ伝達を見れば明らかのように、ここでも文字への翻訳と同様に、「顔文字」への翻訳がなされているからである。しかしながら、次のように考えることもできる。「顔文字」に現れているのは、文字よりも直接的に意志を伝えたいという若者を中心とした送信者の欲望である。と。すなわち、大澤は電子メディアがもたらす極限的な他者への接近が、受け手の「参与性」を高めると考えるのである。

ここで、もう一つ大澤が目にする携帯電話に特徴的なメッセージ伝達を取り上げたい [2004: 111-113]。それは、「ワンギリ」と呼ばれるメッセージ伝達である。「ワンギリ」とは、ワンコールのみ鳴らして、相手の電話に着信履歴だけを残す方法である。この行為によって伝達されるメッセージには、文字や「顔文字」などのように、メッセージの内容は存在しない。相手に伝達されるのは、自分が相手に接続しようと「する(した)」という事実のみである。大澤によれば、ここで重視されているのは、メッセージの内容ではなく、互いに接続しあっているという事実だけなのである。そうすると、大澤のいうように、この具体例から見出すことができるのは、メッセージの内実を背景化してしまうほどの「コミュニケーションへの欲望」であるといえる。

「顔文字」や「ワンギリ」によるメッセージ伝達から見出されるのは、次のことである。電子メディアのもつ特性、すなわち「時間的・空間的距離の克服」は、コミュニケーションの形式を変化させる。ここでは、意味交換としてのメッセージ伝達だけではなく、「直接的なコミュニケーションの欲望」というメッセージも伝達されているのである。つまり、電子メディアは、送信者の他者に対する「極限的な直接性」の欲求を喚

起するように、作用しているのではないか。

## おわりに

今日のメディアの技術的発達には、目覚ましいものがある。今となつては、マクルーハンが生きた1960年代に急速に普及したテレビは、携帯電話の一機能に過ぎない。もはや、私たちはマクルーハンの想定したメディア状況にいないのである。そのため、新たなメディアが登場し普及するたびに、私たちはテレビ創成期を生きたマクルーハンの限界を認識する。

しかしながら、「メディアをいかに捉えるのか」というメディア観に注目するならば、私たちは未だマクルーハンの想定した範囲のうちにいるのかもしれない。具体的にいえば、私たちは、マクルーハンが批判したメディアによって伝えられるメッセージの内容に偏った分析に終始しているように思える。この偏向を克服するために必要なのは、マクルーハンの提唱する「メディア・アプローチ」を現代のメディア状況を踏まえ、更新することである。大澤は、話し言葉や文字・活字と比較することで、電子メディアの特性、すなわち「時間的・空間的距離の克服」を抽出する。そして、大澤は若者らが携帯電話を利用して行なうコミュニケーションに目を向け、その分析を行なう。その結果、彼は、電子メディアが送信者の他者に対する「極限的な直接性」の欲求を喚起する作用をもつことを導き出すのである。つまり、大澤の試みは、「メディア・アプローチ」の更新という課題を引き受けたケース・スタディーの一つと見ることが出来る。

このように考えると、マクルーハンと大澤は、「メディア・アプローチ」に基づき、メディアの作用を明確にする点で共通している。このために、彼らは、メッセージを伝達する手段としてのメディア、つまり「道具としてのメディア」というメディア観を意識的に放棄している。彼らは、人間に作用を及ぼす存在としてメディアを捉えるのである。私たちは、日常生活のなかでメディアを単なる他者とのコミュニケーションを可能にする道具としてしか認識しない傾向にある。しかしながら、この単なる「ツール」であるはずのメディアは、それぞれの特性に応じて、私たちの世界認識やコミュニケーションの形式を規定する存在である。紙に印刷された文字、テレビに映し出される画像、携帯電話のスクリーンに映し出される「顔文字」、「ワンギリ」によって残る着信履歴は、他者から伝達される単なるメッセージと捉えるだけでは不十分である。これらは、それぞれのメディアが、私たちの認識やコミュニケーションに枠を与えているメッセージでもある。

確かに、教育行為に注目するならば、今井のいうように、言語に代表されるメディアは、教師と生徒のあいだに存在し、両者の「すれちがい」を可能にする。いわば、他者からの暴力や強制を回避する「間接性」という特性をもっているということもできるだろう [2004: 36-38]。しかしながら、メディアに依拠しない限り、メッセージ伝達が不可能であることは、次のことを意味している。私たちはメッセージのやり取りを通じて、その度に他者だけではなく、メディアそれ自体とも関係を構築している。メディアは他者からのメッセージと同時に自らのメッセージ、「メディア自体がいかに私たちを規定しているのか」も伝達しているのである。マクルーハンや大澤による「メディア・アプローチ」は、メディアがもたらす二つのメッセージのうち、メディア自体からのメッセージを明らかにする方法である。メディアの作用が、メッセージ伝達を規定していること、さらに、その規定の様相を明示できる点に「メディア・アプローチ」の可能性がある。

## 【注】

- 1) このような見解は、視聴覚教育の領域に顕著である [例えば佐伯 1998 / 水越 1998]。さらに、このような見解は、1960年代にも確認することができる。シーブマン (Charlfs A. Siepmann) は、当時の教育家の見解を次のように紹介している。「私はただ眺めるだけの子どもを好まない。子どもに何か物事をやってもらいたい」 [1954: 3]。しかしながら、当時においてこのような見解が支配的であったとはいえない。テレビという新たなメディアに積極的役割を見出し、テレビに利用価値を見出す主張も数多く存在するのである。当時の教育学者は「テレビが子どもへ悪影響を及ぼしている」という見解に十分に懐疑的である。彼らは、テレビがもたらす教育の変化やテレビの教育利用を論議している [例えば、西本 1959 / 1960 / 海後 1959 / 渡辺 1969]。
- 2) 今日注目を集めるメディア・リテラシー論は、メディアによる情報を教育利用する試みといえる。この潮流にしたがうと、マスメディアによる情報は加工された情報である。だから、生徒はその情報を識別できる能力を身につけるべきである。すなわち、テレビ番組などのメッセージの影響を問題視し、そのメッセージを教育内容としているのである [オンタリオ州 1992 / 鈴木 1997]。
- 3) マクルーハンにふれた教育学研究は、情報教育やメディア・リテラシー論のなかで彼の見解を参照するにとどまっている。例えば、マクルーハンやメイロウイツの見解を参照しながら、情報化社会の学校教育のあり方を検討した研究 [坂本 1996]、カナダで実践されているメディア・リテラシー論には、マクルーハンの主張が影響しているという事実が指摘されている [Pungente and O'Malley 1999]。しかし、いずれもマクルーハンの主張を本格的に検討した研究ではない。
- 4) 彼は、テレビ番組などのメディアによる情報を吟味することで、メディアの人間への作用を考察する立場を「情報理論アプローチ (information theory approach)」と呼んでいる [1960: 572]。マクルーハンは、このアプローチに基づく、「メディアの形式」が意識されないと批判する。その一方で、「メディア・アプローチ」に基づく、「メディアの内容」とは別のメディアであるという理解が生じる。例えば、印刷物の内容は話し言葉である、と [1960: 572]。このようにマクルーハンは、従来のメディア分析を批判するために、「メディア・アプローチ」という言葉を使用する。本稿では、このことを踏まえ、「メディアの形式」、つまりメディアの作用を分析する方法として「メディア・アプローチ」を捉える。
- 5) 1960年代においてマクルーハンの〈メディア論〉は、テレビ関係者らによって支持された。この動向は「マクルーハン旋風」と呼ばれた [Marchand 1998: 200]。その当時、研究者のマクルーハンの見解に対する反応は冷たいものであった [Levinson 2001: 24-25=2000: 55]。その後1970年代の空白期間を挟んで、1980年代以降、マクルーハンは再び注目を集めている。
- 6) 例えば、マルシャン (Philip Marchand) やゴードン (W. Terrence Gordon) は、マクルーハンの私生活に目を向け、彼の主張の全体像を把握する試みのなかで、マクルーハンの教育に関する主張を取り上げている [Marchand 1998: 199 / ゴードン 2001: 106]。さらに、レヴィンソン (Paul Levinson) やホロックス (Christopher Horrocks) は、現代社会におけるマクルーハンの意味をデジタル社会、ヴァーチャル世界とのかかわりから再考する。これらのなかでもマクルーハンが教育に大きな関心をもっていた事実を紹介している [Levinson 2001: 116=2000: 199-200 / Horrocks 2000:18=2005: 20]。
- 7) ポストマン (Neil Postman) が、子どもの変化を述べる根拠は、活字とテレビがもつ特性上の差異にあるといえるだろう [1985]。
- 8) マクルーハンは明確にホットとクール二分法の由来を述べていない。両者の性格を的確に捉える上で参考になるのが、レヴィンソンの指摘である。レ

ヴィンソンによれば、この二分法はジャズ音楽のストラングを引用したものであるという。「ホット」な音楽は、大音響のビッグバンドによる魂を揺り動かし観客を酔わせる音楽である。一方、「クール」な音楽は、小さなバンドによる心を惑わせ誘い込む音楽である。レヴィンソンによれば、この差異が、「ホット」と「クール」の由来であるという [2001: 106 = 2000: 183]。

- 9) この著作の構成は二部構成である。第一部はイントロダクションと「メディアはメッセージ」などのメディア一般に関する考察である。第二部は「話し言葉」から「オートメーション」までの26項目の彼の考える具体的なメディアに関する考察となっている。
- 10) マクルーハンは、例えば、統計上小学校低学年のどれくらいが、マクルーハンのというような姿勢で読書しているのかなど、自らの主張の科学的根拠を示していない。

## 【文 献】

- Horrocks, C. (2000) *Marshall McLuhan and Virtuality*, Icon Books. = (小畑拓也訳) (2005) 『マクルーハンのヴァーチャルの世界』岩波書店。
- Levinson, P. (2001 [1<sup>st</sup>. edition. 1999]) *Digital McLuhan: A Guide To the Information Millennium*, Routledge. = (服部桂訳) (2000) 『デジタル・マクルーハーン - 情報の千年紀へ』NTT出版。
- Marchand, P. (1998 [1<sup>st</sup>. edition. 1989]) *Marshall McLuhan: The Medium and the Messenger*, MIT Press.
- McLuhan, M. (1960) Effects of the Improvements of Communication Media, *The Journal of Economic History* pp.566-575.
- (1962) *The Gutenberg Galaxy: The Making of Typographic Man*, University of Toronto Press. = (森常治訳) (1986) 『グーテンベルク銀河系 - 活字人間の形成』みすず書房。
- (1965 [1<sup>st</sup>. edition. 1964]) *Understanding Media: The Extensions of Man*, McGraw-Hill. = (栗原裕他訳) (1987) 『メディア論 - 人間の拡張の諸相』みすず書房。
- McLuhan, M. and Q. Fiore (1967) *The Medium is the Massage: An Inventory of Effect*, Penguin Books.
- McLuhan, M. and G. B. Leonard (1967) The Future of Education: The Class of 1989, *Look*, 21 Feb., pp.23-25.
- Meyrowitz, J. (1996) Taking McLuhan and "Medium Theory" Seriously: Technological Change and the Evolution of Education, Kerr, S. T., et al., eds., *Technology and the Future of Schooling*, NSSE, pp.73-110.
- Ong, W. J. (1982) *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*, Methuen. = (桜井直文他訳) (1991) 『声の文化と文字の文化』藤原書店。
- Pungente, J. J. and M. O'Malley (1999) *More Than Meets the Eye*, McClelland & Stewart.
- 今井康雄 (2004) 『メディアの教育学 - 「教育」の再定義のために』東京大学出版会。
- 大黒岳彦 (2003) 「電子メディア時代の教育パラダイム」『メディア教育研究』第10号, 13-21頁。
- 大澤真幸 (1995) 『電子メディア論 - 身体メディアの変容』新曜社。
- (1999) 「電子メディア共同体」吉見俊哉他『メディア空間の変容と多文化社会』青弓社, 47-94頁。
- (2004) 「もう一つの『ハイデガー、ハバーマス、ケータイ』」マイアソン, G. (武田あき訳) 『ハイデガーとハバーマスと携帯電話』岩波書店。
- 大和田直樹 (1999) 「戦後教育におけるメディア言説の論理構成 - 〈特性〉としてのメディア・〈作用〉としてのメディア」『教育社会学研究』第64集, 205-223頁。
- オンタリオ州教育省 (FCT 訳) (1992 [1<sup>st</sup>. edition. 1989]) 『メディア・リテラシー - マスメディアを読み解く』リベルタ出版。
- 海後宗臣 (1959) 「教育課程と視聴覚教育」西本三十二他編『ラジオ・テレビ教育精説』日本放送教育協会, 11-19頁。
- ゴードン, W. T. (宮沢淳一訳) (2001 [1<sup>st</sup>. edition. 1997]) 『マクルーハーン』ちくま学芸文庫。
- 佐伯胖 (1998) 「高度情報化と教育の課題」佐伯胖他編『情報とメディア (現代の教育 第8巻)』岩波書店, 3-23頁。
- 坂本旬 (1997) 「『メディア論』と情報教育の政治性」『法政大学文学部紀要』第42号, 107-126頁。
- シープマン, C. A. (真木進之助他訳) (1954 [1<sup>st</sup>. edition. 1952]) 『テレビと教育』法政大学出版局。
- 鈴木みどり (1997) 「メディア・リテラシーとは何か」鈴木みどり編『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』世界思想社, 2-22頁。
- スティング, S. (今井康雄訳) (2001 [1<sup>st</sup>. edition. 1994]) 「文字と主体」Ch. ヴルフ編 (高橋勝監訳) 『教育人間学入門』玉川大学出版部, 46-72頁。
- 西本三十二 (1959) 「現代の教師とラジオ・テレビ」西本三十二他編『ラジオ・テレビ教育精説』日本放送教育協会, 11-19頁。



M. マクルーハンによる「メディア・アプローチ」の可能性 —メッセージ伝達におけるメディアの作用—

———(1960)『テレビ教育論』日本放送教育協会。  
藤井青銅 (2005)「ギャル文字, へた文字」黒須仁他編  
『知恵蔵2005』朝日新聞社, 500-502頁。  
ポストマン, N. (小柴一訳) (1985 [1<sup>st</sup>. edition, 1982])  
『子どもはもういない』新樹社。

水越敏行他編(1996)『変わるメディアと教育のあり方』  
ミネルヴァ書房。  
渡辺彰(1969)『現代TV教育論－現場実践の立場から』  
新光閣書店。

(主任指導教員 坂越正樹)